

日常生活における安心感をめぐる

— C・M・シュルツ著

『ほっとするのは指しゃぶりと安心毛布』 —

磯部 景子

二〇〇〇年三月末日に、私は山口大学を定年退職しました。

学生時代、幼稚園に通って、子どもたちや保育者の普段の生活にふれながら、保育について考え始めました。今、再び、自由な時間を得て、長年の夢であった、幼稚園の日常生活に浸りながら、保育につ

いて学んでいきたいと願っているところです。

保育や子どもの生活について学び始める時、沢山の知識をもとにするというより、子どもたちが生きている世界にふれながら、ひよっとすると見逃してしまいうるななさやかな事柄について、感じたこと、考えたことを大切にしたいと思っています。

私自身の生活を振り返ってみても、幼稚園に行つて、幼稚園で生活している人々のさまざまな場面に会った折にも、それぞれの人の居場所があり、それぞれの人が、安心感のある満ち足りた生活をしていることの大切さを感じてきました。人が毎日の生活で、安心して、日々の生活を十分に生きることの大切さを思います。

特に人生の始まりの部分を生きている子どもたち、おとなの支えを必要としている子どもたちが、安心感にひたり、心満たされて、その人らしさを十分にあらわしながら生活することを大事にしたいと思います。

大学で授業を受け持つことになり、私が最初に直面したことは、保育について、普段、私が大切に思っていることを、言葉で相手に伝えることの難しさでした。

保育について学び始める人にとって大切なこと

は、保育場面に参加して学ぶことだと思います。

『学生といっしょに幼稚園に行く』ことを実現する準備をすすめながら、講義に臨む時に助けられたのは、C・M・シユルツ著の『SECURITY IS A THUMB AND A BLANKET』（『ほっとするのは指しゃぶり』と安心毛布）でした。

ここでは、その当時から現在に至るまで、いつも新鮮な思いで読み、日常生活における安心感について考えるよすがとしている、『ほっとするのは指しゃぶり』と安心毛布』の本を取りあげます。

まず本の外形を述べますと、縦十五・三センチ、横十四・五センチ、厚さ〇・九センチの小さなハードカバーの本です。おもて表紙、うら表紙とも同じつくりで、四辺は〇・五センチの白い縁で囲まれている。背表紙も白で、黒い文字でSECURITY IS A THUMB AND A BLANKETと書いてある。

表紙は白縁の中は赤色の地で、四辺のそれぞれに

そして、辺いっばいに黒い文字で大きくSECURITYと書いてある。SECURITYの文字で囲まれた内側に、上辺と左右の辺に、それぞれ小さな文字でIS A THUMB AND A BLANKETと書いてあり、下の辺に出版社名が書いてある。これらの文字で囲まれた中に画面いっばいに子どもが安らいだ満足した表情で、両足を前に出して座っている。右手の親指をしゃぶり、左手で毛布をほおにあてている。これも黒い線で描かれている。

次に頁をめくつていくと、見開きになっている左の頁はすべて黒い画面で白抜きで「Security is」で始まる。「安心なのは……です」、「ほっとするのは……です」、「安全なのは……です」など、三十場面が展開していく。

右頁には、左頁の言葉で述べられている場面の絵が黒い線で描かれている。地の色は黄色、濃い桃色、赤色の順のくり返しとなっている。そして三十

一場面目として、左頁に濃い桃色の地に黒い文字でMy security is……となっている。

さて、安心感をめぐる三十場面からいくつかの場面をあげてみます。

「安心なのは、寄りかかれる（たよれる）人がいることです」 スヌーピーが安心しきった様子で、チャーリー・ブラウンに寄りかかっている場面。

「心落ちつくのは、足にピッターあつたくつ下をはいていること」 ライナスが満足そうに足元をみつめている場面。

「安心なのは、ピアノを弾く時、楽譜があなたの前に置いてあること」 シュレーダーが、じっと楽譜に目をやり、心おだやかにピアノを弾いている場面。

「安心なのはお兄さんがいること」 サリーが、うれしそうに、お兄さんのチャーリー・ブラウンと手をつないでいる場面。

“安心感があるのは、箱の中に座っていること”
ライナスが大きな箱の中で、満足そうに座っている
場面。

“安全なのは、大きな犬がとびかかってこないこと
がわかっていること” サリーの前に、サリーの背
丈の二倍はありそうなしつかりした金網がはりめぐ
らしてある場面。

“安心なのは足が底についていること” サリーが
水着を着て水の中に入っている。足が底について、
ああ、よかったという様子をしている場面。

“心が安らぐのは、あなたが話していることをきい
てくれる人がいること” サリーが話していること
を、スヌーピーが神妙な顔をしてきいている場面。

“ほっとするのは、休日のあと家に帰ること”
シュレーダーが荷物に囲まれて、ほっとした顔をし
ている場面。

“ほっとするのは、学校から家に帰った時に、台所

でお母さんの声がきこえること” ライナスがおち
ついた様子で玄関を入っていく場面。

“心がやすらぐのは、あなたがひとりではないとわ
かっていること” 子どもが、ベッドのそばでひざ
まずいてお祈りをしている場面。

そして、最後の見開きの、“私が安心であること
は……” では右頁は黒い画面で何も書いてない。
余白になっている。

どの場面の言葉も明解である。どの場面も、日常
生活の安心感をめぐる具体的な場面がくつきりと示



されている。

最後の場面の「私が安心であることは……」では、それぞれの人の、その折り折りの、さまざまに安心感を思いめぐらせるようになっていく。

ここに登場する子どもはアメリカの子どもたちであるが、一地域のわくをこえて、子どもものわくもこえて、人間が生きていくのに大切な本質にかかわることが描かれている。

三十年間、『ほつとするのは指しゃぶりと安心毛布』をくり返し読んでいるうちに、シュルツさんはどういう方だろうと興味をわいてきた。折々に出会ったチャールズ・シュルツさんについてのメモの中で、今、私が一番魅力を感じているのは次に述べる点です。

「シュルツ氏は、マンガを描くのに一切の助手を使わないということです。それについて彼は、『私と

いう人間は常に変化しています。また、これまでに私が造ってきたものを少しでも改善していきたいし、絵に文字を書き入れている最中でも、その努力を続けているのです。』^{註1}と言っています。」

廣淵升彦氏は『スヌーピーたちのアメリカ』で、「今日のような大家になっても、アシスタントはいつさい使わない。一本の草といえども自分で描く。吹き出しの中に入れるせりふも一字一字でいねいに自分で書いていく」と述べている。

これらを見ていくと、シュルツさんの生き方や「ピーナッツ」の仕事への情熱の一貫した姿勢がみえてくる。

チャールズ・シュルツさんが、「私という人間は常に変化しているということを大事にしている」と述べていることは、他の人に関することがらや、世の中のできごとのささやかな変化にも敏感に応じているように思えてくる。

この稿をおわるにあたり、チャールズM・シュルツ氏について記します。

チャールズM・シュルツ

一九二二年十一月二十六日

アメリカ・ミネソタ州セントポール生まれ。

第二次大戦従軍後、一九四七年「セントポール・パイオニア・プレス」紙にピーナッツの前身というべき「リル・フォークス」(子供たち)のシリーズを二年間掲載。

一九五〇年、投稿がユナイテッド・ファイチャー・シンジケートの目にとまり、十月二日より「ピーナッツ」のタイトルで新聞連載がスタート。史上もつとも多くの読者を持つ新聞漫画となる。

二〇〇〇年二月十二日。

チャールズM・シュルツさんは亡くなった。

註

1 ツルピーナッツブックス 第四十二巻『友情だよ！

スヌーピー』(ツルコミック社 一九七五年)の巻末の

解説(ツルコミック編集部)による。

2 『A Peanuts Book, featuring SNOOPY (24)』

『今日何したの?』(チャールズM・シュルツ 谷川俊太郎訳 角川書店)の作者紹介による。

参考文献

『A Little House of Your Own』 Irene Haas

Collins, St. James's Place, London 1967

『Security Is A Thumb And A Blanket』 Charles M. Schulz

Paul Hanlyn, London 1963

『スヌーピーたちのアメリカ』 廣淵升彦 新潮社二〇〇〇

年

『スヌーピーと仲間たちの心と時代』 廣淵升彦 講談社

一九九五年